

ベルジャーエフの終末論的倫理学について

谷 川 守 正

本質的に非合理的性格を帯び、一義的な定義づけを許さない悪の問題は、根本的に人間への深い洞察なしには解きえない。小論は、(一)悪はどこから生じるのか、(二)いかにして悪と戦うのか、(三)善悪の対立をこえた真の善は何かについてのベルジャーエフの基本課題をとりあげ、彼の終末論的倫理学の体系化を試みる。それを通じて、彼の神人論の一側面が解明されるであろう。

まず悪の由来について、われわれは彼の歴史形而上学的立場から神秘、神話、そして歴史の世界において悪の系譜を探求し、そこから悪の性格を導き出し、そのような悪との外面的、内面的、そして終末論的戦によって悪がいかにして克服されてゆくかを論じ、つぎに善悪の彼岸にある真の善を求めて、現世、地獄、そして天国における善悪の区別の諸相を見て、さらに善悪の彼岸への道を人間の良心の創造活動の中に見出し、最後に、終末論的倫理学の確立の方向を打出すことにしたい。

(一) 悪 の 由 来

神の国や彼岸的世界に悪が存在するか否かは別にして、この世における悪の現存在は、否定しえない道徳的事実である。この事実から出発するとき、さまざまな方向への展開が可能であるが、それは、一つには宗教的問題である。実際、その事実がキリスト教的世界の神信仰をその根底からゆさぶる。悪はキリスト教的世界観における根本問題の一つである。それは人間存在への問であるとともに神への問いかけでもある。神が創造し、全智全能の神が支配するこの世界において、なぜ悪が存在するか。悪の存在は神の全能性を否定しはしないか。神は悪に対しては無力ではないか。等々。悪の現実的経験は、このような神とその御業に対する深い疑問をもたらす。

この世に悪が現存し、それによってわれわれが苦しむかぎり、われわれはこの世界を唯一の完全なものと考えることはできないであろう。むしろこの世界は完成途上において、なお創造活動によって変容されなければならないものであり、その意味で天地創造は継続中と考えざるをえないのではないか。しかしながら悪の存在はけっして神の存在の否定を意味しない。逆に世界における悪の現存在は、逆説的に神の現存在の証明である。「神は悪と苦難が存在するゆえにこそ存在する。世界に悪があることは神の存在の証明である。もしも世界がもっぱら善で

あり、純粹であるならば、神の必要もなく、世界はすでに神となっているであらう。¹これはまさに要請的無神論の裏返しである。悪とそれにともなう苦があるゆえに、被造界になお神的創造活動が世界の終末まで継続するのであり、また人間は神の似姿としてそれに参加し、彼岸を求めてこの世界を超越しようとするのである。悪と苦の現存から、神や彼岸が明らかになるであらう。したがって、悪はこの世界内の問題だけにとどまらず、この世界にかかわる神自体の問題であり、神の天地創造に関する問題であり、ひいては弁神論の問題となる。

神と悪の関係についての弁神論の試みは、しばしば悪の神秘主義的解明へ、あるいは悪の形而上学的究明へと向かわせる。ソクラテスが悪の源を人間の魂の無知とみなしたように、悪が消滅するためには何が善であるかを知ればこと足りるとするギリシア哲学の主知主義を拒けて、ベルジャーエフは主意主義の方向に悪の問題への接近を試みた。実際、ドストエフスキーにおける悪の自由の問題は知性主義的接近によっては十分に解明しつくされないであらう。悪の問題に沈潜するとき、「われわれの意識において超越的なものと内在的なもの、一元論と二元論の永遠の二律背反から逃れるすべはない。この二律背反は良心においても、理性においても解消されることができず、宗教的生活において、宗教的経験そのものにおいて解消されることができる。宗教的経験は究極的に世界を神から完全に離れたものであるとともに、まったく神的なものとして経験する。それは悪を神的理性から墮落したものとしてとともに、世界の発展過程において内在的意味をもつものとして経験する。神秘主義的グノーシスはつねに悪の問題に対して二律背反的解決を見出した。そこにおいて二元論が神秘主義的に一元論と結びつけられている。もっとも偉大な神秘主義者、ヤーコプ・ベームにとって、悪は神の中にあった—そしてそれは神からの墮落であった。神の中に暗闇の源があった—そして神は悪に対して責任がなかった。」²ベルジャーエフは悪の問題について合理主義的、知性主義的に二律背反を解消しようとするのでなく、その非合理性を承認して、それをどこまでも深い宗教的体験の世界において受けとめようとする。逆説的、二律背反的な悪の問題と対決する宗教的経験について彼はいう。「わたくしは、神秘主義的経験の最後の深みにおいては一元論者であり、内在論者であり、世界の神的性質、世界過程の内的神性、地上のあらゆるものの天上的性質、人格の神性を信じてはいるが、自由と必然、神や神的生とこの世界、善と悪、超越的なものと内在的なものとの断絶や二元論を肯定する。この種の根本的、革命的、和解しがたい二元論は、神的生の最後の一元論へ、人間の神性へ導く。これがキリスト教の全秘儀である。」³と。われわれはそこに彼のキリスト学の基本構想を読みとりうる。重要なことは、神秘主義的経験の最後の深みにおいて神人性の信仰がとらえられていることである。キリストの神人的実存が、英雄的二元論から神的生の一元論への転換における重要な契機とされる。天上的なものと地上的なものとのきびしい断絶や二元論的対立を認識しながらも、キリストの神人的実存を信じることによって、

1 ベルジャーエフ著作集2 ドストエフスキーの世界観 斎藤栄治訳 白水社 1960 102頁

2 Nicolas Berdyaev, *The Meaning of the Creative Act*, translated by Donald A. Lowrie, New York, Harper, 1955 p. 16.

3 Ibid. p. 18.

彼は三位一体的な神的生の一元論へ参入しようとする。このような形で悪の問題を根本的に解決するためには、最後のところでわれわれは、人間の神格化に導く偉大な転換を神秘主義的に追究しなければならないであろう。

彼がいうように、「弁神論の問題は、自由を通してのみ解決される。悪の秘密は自由の秘密である。」彼の自由は、⁴ ベーメの無根拠に近い神智学的観念である。⁵ ベーメ的無根拠の深みに達する自由は、この世界の根底にある。ベーメにしたがえば、世界の深みに無根拠があり、それから生の暗い流れが出る。それはまだ神的原理の光によって照らされていない。この深奥の、あらゆる善や悪に先行するところの存在の暗黒は、最後まで、いつも合理化されえないものである。そこには新しい、光化されないエネルギーがつねに流れ出る可能性が潜在する。すべての可能性は、この無根拠の中に隠されている。すなわち自由や生成は、神からの流出ではなく、無根拠から出る。したがって究極的に自由は暗い無根拠に根差している。ここに自由の非合理性がある。

無根拠的な性質を有する自由は、その可能性の一つとして悪の自由を成立させる。悪の自由こそ自由の悲劇的運命である。自由は、その暗い本性のゆえに悲劇的である。可能性の源として善を生み出すとともに悪をも生み出す自由は、根源的に善と悪とに先行するのであり、それ自体、善か悪かを選択することがなく、存在の究極としてただ生み出すばかりのものである。このような根源的自由があればこそ、神自身も苦しみ、十字架につけられたのである。それゆえに、自由の悲劇は、必然的に神的生の悲劇につながる。

神的生の悲劇の中に、われわれは悪の系譜を探りうるであろう。ベルジャーエフは、神秘主義的経験の深みにおいて、悪の源を神的生における悲劇として把えた。その悲劇は、根源的に神の生誕にさかのぼる問題である。彼は創世記の天地創造に先立つ神の生誕について、ベーメの神秘思想に依拠して神秘主義的に解明する。「神の本性の中に、神よりも深く、なにか始原的な暗い深処が静まり、その内奥から神統譜的な過程、神の生誕の過程が起ってくる。この過程は、かの始原的な、無根底の、あらゆる表現を絶した、絶対的な、非合理的な、われわれの諸範疇のなにも一つもあてはまらない、『無深処』と比較すれば、すでに第二の過程である。ひとつの根源、存在の泉があり、そこから永遠の流れが奔湧する。この永遠の泉の中へ、劫初以来、⁶ 神的光明が差しこむ。その中で神的生誕の業がなすとげられる。」すなわち人間の本性の中に人間よりも深く、神性が宿るように、神の本性の中に神よりも深く、無根拠が宿り、そこから神の生誕の過程が起こるのであるから、神の生誕に先行して、根源的自由があると考えられる。そのために、その過程において展開される神の天地創造の業は、それに先行する根源的自由のうちに含まれている悪の可能性を回避しえない。ここに神的生の悲劇性がある。

4 Nikolaj Berdiajew, Die Philosophie des Freien Geistes: Problematik und Apologie des Christentums, Deutsch von Reinhold von Walter, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1930, S. 187.

5 ただ後者が神中心的、前者は人間中心的観念である。ベーメの弁神論に対して、彼はむしろ弁人論を展開する。

6 ベルジャーエフ著作集1 歴史の意味—人間運命の哲学の試み— 永上英広訳 白水社 1960 72頁

神の本性の中にある無根拠、あるいは神的無から、父なる神が誕生する。創造主は、まず神的無に直面し、無から天地と人間を創造した。無の深淵から生まれた暗い意志としての自由は、天地創造に際して神の御業に同意し、それとともにこの世界にはいりこんだ。それはそこから天地が創造された無の一部である。創造主としての神は、この自由に光をあてようとした。「しかし、神が自由のうちに含まれた闇の力に打ち克つにはどうしても自由そのものをなくしてしまうよりほかにしかたがなかった。だが、神は自由をなくしてしまうことができないから、やむをえず闇の力すなわち悪しき自由を残した。そのためにこの世には悲劇と悪があり、すべての悲劇は自由と結びついているのである。」⁷ そのために無は、神の光に勝ち、それによって、はじめは善でも悪でもなかった無を悪にしてしまう。神が当初から自由を欲し、期待したがゆえに、世界は悲劇とともに始まった。神の悲劇とは、ひとえに創造主としての神が被造物に対しては絶対的な力をもつが、自由に対してはなんの力をもっていないところから生じる。ここにおいて、われわれは根源的自由と神との関係を明らかにしなければならないが、ベルジャーエフはこの点について二つの段階を措定する。「神生論的過程と神的生命における悲劇とは、無のうちにある根源的自由の存在を前提とし、またそのうちにおいておこなわれる。ところがこれに反して、創造主と被造物、あるいは神と人間とが存在する第二の段階においては、根源的自由は神のそとにあるものと考えられる。われわれは存在を神のそとにあるものと考えてはならないが、無を神のそとにあるものと考えすることは許されるであろう。またそう考えなければ、悪の責任を神のせいにしなさいではいられない。存在と無の区別は、神的無という窮極的神秘のなかに消えてゆく。」⁸ 第二の段階において、存在と無の区別が生じ、無は神のそとにおかれ、悪の根源となる。その無は、第一段階の無、すなわち神の本性の中にある神的無とは区別されなければならない。後者は存在と無の区別に先行する。第二の段階において、根源的自由は神のそとにあり、あえていえば、神によって創られなかった。被造物におけるこの自由の潜在は、創造主の責任でなく、神の子であるとともに自由の子でもある人間の自由の問題である。悪はしたがって人間的自由の問題である。

人祖アダムの物語によれば、天国において人間は無垢であった。キエルケゴオルがいうように、無垢は無知であり、いわば精神は人間の中で夢見る状態にある。天国は、夢見る精神の人間にとって無知の世界であった。人間は自由というものを知らず、人間の自由はまだ自らをあらわにしてはいなかった。すなわち精神の自由は自己を表現したり、積極的な創造力を発揮しなかった。しかしその自由は天地創造に際して消滅したのでなく、神の創造の業に同意し、自由に有をうけ入れて、無垢な人間の幸福な楽園において一時身をひそめたにすぎない。楽園から出る自由は、なお彼に留保されている。その夢見る精神に向って神が、「知恵の木の実を食うべからず」と命じたのは、苦と死へ導く悲劇的道への警告であった。この知恵の実こそ、自

7 ベルジャーエフ著作集3 人間の運命—逆説的倫理学の試み— 野口啓祐訳 白水社 1966 77頁

8 前掲書 76頁

由から生まれ、非合理の暗黒で育ったものである。人間が楽園の幸福を捨て、生命の木の実よりも知恵のそれを取り、苦悩と苦難の悲劇をみずから選びとったのは、人間の本性にひそむ自由の働きであり、それによって楽園における人間と神との親しい交わりは拒否される。人間は創造活動への神の呼びかけを拒絶して、無の暗黒へ逆行しようと試みる。人間の活動に相反する二つの方向が生じたとき、あらゆるものを分裂の相におとし入れる意識が誕生し、善と悪との区別を知った意識は、すべてのものに区別をつけはじめた。人間はあえてみずからあらゆるものを区別し、それによって苦しみ、また死ぬことを選んだ。人間の原罪は、夢見る精神における神への反逆である。彼の拒否的応答は、根源的自由の最初の自己発現である。精神は世界存在の階層秩序の最高段階に位置するため、根源的自由は存在の階層秩序の最高段階において悪を生んだことになる。すなわち悪の最初の発現は、物質の低みにでなく、精神の高みにおいてである。したがって悪は第一義的に精神的性質を持ち、精神的世界において発現する。

しかしながら、ベルジャーエフは逆説的に楽園追放の意義を説く。「人間は悪をおこなうからこそ神に対抗し、神から離れて独立し、自分から地獄の世界をつくり出すという驚くべきことをやってのけることができるのであって、悪をすることができれば、人間にそういう力も生じないはずである。この意味からいうと、原罪という考えは、人間にとって実に誇り高い考えである。人間は原罪によってどれほど奴隷根性から救われているかわからない。もしも人間が楽園から追放されたとするならば、それだけ人間は自由でまた実力を持っている被造物ということができよう。」¹⁰ 知恵の木の実を食べたために、人間に知恵の原理が宿り、それによって人間はより高い意識とより高い精神に達し、自由を知るあたらしい天国に移ることができる。それが歴史的世界の究極の目標である。

もし人間の生の始原的原因に由来する悪の自由がないならば、その暗い原理がないならば、そして善の自由と神の自由のみがあって、それが人間の運命における一種の予定をなすならば、世界は発端のない、むしろ終結した世界、完全な善と完全な美の形式をそなえた完全なコスモスとしての神の国となるであろう。それはギリシヤ的意識が志向したコスモスの形相的完全性の世界と一脈相通じる。しかしそのような完全なコスモスにおいて、世界過程ははじまらない。歴史的過程が存在するのは、もっぱらその根底に善の自由と悪の自由の葛藤があることによる。高次の神的生の源泉から叛き去る自由と、またそこへ復帰し、接近する自由があることによる。この悪の自由がまた真の歴史の根拠でもある。ヘブライ的意識が歴史的なものを発見し、これに依拠したキリスト教的意識において、悪の自由が開示される。

悪の自由は歴史的過程の萌芽であった。それが歴史に内在し、歴史的過程のドラマ的性格とその悲劇性を決定する。それは歴史的過程における人間の運命の悲劇性の根源、あらゆる葛藤と恐怖をともなった歴史の悲劇性の根源となった。人間はこの原初的自由を神の子として賦与されたために、墮落と発展の二つの過程が展開するところの世界の中で悲劇的運命に苦悩する

9 そこでは宇宙は人間に宿り、また人間は神に宿っている。しかし墮落の結果、逆になる。

10 ベルジャーエフ著作集3 69頁

のである。

悪の根源から悪のいくつかの性格を導き出すことは容易である。悪の根源は、上述のように、無であり、暗黒の深淵であり、存在に先行する非存在であり、非合理的自由である。それゆえに悪は、虚無的、暗黒的、非存在的、そして非合理的性格を有する。「悪の非存在性と空虚さの暴露だけが、善と悪の対立の意味を明らかにし、悪が何であるかについての知識を与える。悪は悪の認識の経験とその内面的克服の経験においてのみ認識可能である。その経験においてのみ、空虚の裂けた深淵全体が明らかになる。」¹¹ 弁神論が明らかにしたように、悪は神によって創造された存在でなく、積極的な存在でなく、独立の存在でもなく、否定的性格をもつ。それは悪魔の性格において象徴的に示される。悪魔は自己の存在をもたない。独立の生の源泉を全くもたない。独立の存在ではない。それはすべてを神のもとから盗みとり、歪曲し、醜悪化する。悪魔の権能は幻のような、人を欺く虚偽の力である。それゆえに、悪は存在の虚偽の所産、戯画、醜悪化、疾病である。

悪の本質は非存在であるが、その非存在は悪がそこから出る原初的無からは区別される。原初的無は、あらゆる可能性の根源であり、それ自体善でも悪でもない。悪の系譜において明らかのように、墮落後に善と悪の対立が生じたのであり、「悪は、否定神学論的観念を堅持するかぎり、彼岸的なものには変わりえない此岸的なものである。」¹² この此岸的性格は、悪との戦において重要な意味をもつ。悪は、したがって虚無的、非存在的、非合理的、暗黒的、虚偽的、否定的、分裂的、そして此岸的性格をもつのである。

しかしながら悪が最後のところでは人間の本性をとらえなかったのは、彼岸的原理の愛の働きによる。墮落後人間は最後のところではついに神と断絶をしなかった。そして神は人間に働きかける。神の愛は人間に復活と恩寵のエネルギーをわかち与える生の源泉である。積極的存在は愛の国にのみ存在しうる。愛する者は愛される者のために永遠の生を欲する。それに反して、憎むものは、生の源泉との断絶、すなわち死を欲する。存在の肯定または否定の程度は、それぞれ愛の大きさと憎しみの大きさにかかわっている。それゆえに悪と死からの救済は、分裂を克服する無限の愛としてのみ現われることができる。人間は、したがって究極的に非存在の国、悪の国には属さず、存在とのつながりを維持する。人間において存在、真の存在が働き、そして人間はそれにあこがれる。実に、人間と神との間は、相互憧憬の愛の関係である。

(二) 悪 と の 戦

シェリングが比喩的にいうように、悪は存在の病気であって、悪との戦は、しばしば感染によってそれ自体一つの悪に変化する。人間の罪性のもつ弱さのために、悪と戦う人間でさえ、自己自身は善の中にとどまり、悪に感染しないことは至難事である。悪の道徳的逆説は、悪と

11 Die Philosophie des Freien Geistes S. 215.

12 ベルジャール著 集6 神と人間の実存的弁証法、小池辰雄訳 他 白水社 1960 115頁

戦う善人たちに悪が容易に生じることである。

人は、悪をなかならず自己自身の内に見て、悪との戦を自己自身のもとで始めなければならぬにもかかわらず、しばしば悪に対して外面的に自己の外で戦う。その結果、悪との戦が悪人とのそれにすり替わり、人々は悪そのものでなく、悪人を滅そうとする。外面的に悪と戦う人々は、一般に悪人が悪から解放されることをあまり望まず、たいてい悪人が悪とともに滅びるべきだと主張する。悪や悪人への邪推、疑惑、憤怒等は、悪の新しい姿をとって現われる。もちろん悪に対しては仮借のない態度で臨むべきであるが、その態度自体に悪の萌芽がひそむ。徳や正義の名において彼らはきびしく人々を責め苦しめる。人間性の名において悪の峻烈な告発人たちは非人間的態度に出る。およそ善と自由の敵は、現実のものであれ、彼らの想定したものであれ、自由を奪われ、暴力的に扱われる。そこには目には目を、歯には歯をの倫理がある。

悪とのいわば客体的な戦において、必然的に悪意が働く。人々の魂に悪意がはいり込み、彼らはずいに悪にうちかつことができず、逆に悪の力にとらわれるだろう。一般に、悪との客体的な戦は、一方的に破局に導く。「悪意ある相手方と争う人は自分が悪意をもつように作用する敵対姿勢の弁証法があるが、まさに同様に悪に対する受身の態勢をば悪への順応へと導く屈服の弁証法がある。同様に懲罰そのものが犯罪となる結果をもたらす犯罪の懲罰の弁証法がある。」¹³ これらの悪の弁証法的力に誘惑されて、人間の魂は悪の奴隷となる。そこに主人と奴隷の質的弁証法がある。悪の弁証法的力によって、悪との外面的戦は新しい悪に転落する。

道德生活はたしかに個人的であるばかりでなく、社会的であり、社会的要素によって大きく左右されているが、その根本は精神的世界にある。「なるほど、社会的慣習から見れば、善悪の区別は、社会をもととしているかもしれない。しかし善悪そのものは社会に依存してはいない。それどころかその逆に、社会制度のほうが善悪の窮極的本質によって左右されているのである。」¹⁴ すなわち社会生活の基礎は道德にあり、けっしてその逆ではない。本質的に道德は社会にではなく、人間の内面的本性に依存する。したがって、われわれは魂の内面の解脱を求めて、悪と内面的に戦わなければならない。

悪の出現によって、神の創造の業が悲劇的であったために、神は墮落したこの世と人間について創造主としてでなく、贖罪者として天地創造につづく第二の業を行なう。父なる神は子となってみずからこの世に降り、罪なく苦しみを受け、十字架にかけられた。十字架における神の子の苦と死は、もっとも義しい、偉大な者の言葉に耳を傾けず、神の子を十字架にかけようという罪と悪の世への偉大な啓示である。「神はみずから無のうちに一悪に墮落してしまった自由の深淵のうちに一降り、今度は権力者としてでなく、まさに犠牲者としてその姿を現わす。神の犠牲—つまり神がみずからを十字架につけたのは、この世から悪しき無の自由をむりやりに取り去ってしまったり、それを強制的に消滅させてしまったりするのでなく、まさに悪と無と

13 前掲書 110頁

14 ベルジャーエフ著作集3 57頁

自由の深淵を内部から照らしだすことによって、これを克服しようとするためなのである。¹⁵これが神の第二の業としての救済の意義である。それは自由という謎、悪と苦の根源にある自由の深秘に対する神の啓示である。

悪に対しては神も人間も無力であることが明らかにされた。しかしキリストの神人的実存にこそ悪の克服が期待されうるのである。「ただ人となった神、人間とあらゆる被造物のすべての苦悩と苦難を身にひき受けた神のみが、悪をうち滅ぼし、苦悩にうち勝つことができる。いかなる神学的組織も、いかなる権威も、人間の苦悩と痛苦を終熄させうるものはない。第一にして最高の真理を体現するもの、すなわち神的なものと人間的なものの融合一致体、同時に神的にして人間的なる愛、かかるもののみが人間の苦悩と痛苦に終末をもたらさうるのである。人間的なるものと神的なるもの間のこの絆を決定的にひき裂く人間は、自分が非存在の深淵に立っているのを知る。そして彼の苦悩は耐えがたいものになってゆく。どんな愛も新しい苦悩を伴う。けれども、神的にして人間的な愛である愛が同時に苦悩にうち勝つ。¹⁶非存在の深淵にまでみずから降りるキリストの神人的愛の実存において、見失われた神と人間との親しい交わりは回復されるであろう。そしてこの自由な愛の関係の中に、悪を克服する根源的な力が見出されるであろう。

殺人、復讐、憎悪、犯逆、放縦、隸従等、これら悪の現象は、生の否定につながり、死にいたる。悪は死であり、死は人間の最後の、最大の敵である。悪の克服は、それゆえに究極的に死に対する勝利、生命の復活、新生への誕生である。キリストの復活はまさにそれである。死生観に重大な質的転換をもたらしたキリストの死と復活によってはじめて、自由と愛と創造力の人格的原理が隸従と憎悪と怠惰の非人格的原理に対して勝利することになる。さらにわれわれにとって死の悲劇的意識は、この世界における人格および個人の運命を鋭く意識させ、有限的存在からの超越への契機となる。

われわれはたしかに永生を念願するが、悪と苦に満ちた罪の世界における無限の生は、かえって人間の精神にとって恐ろしく、耐えがたいものであろう。そのような永劫の地獄における生は、むしろ精神的死と同義である。逆説的に死は生の内面的契機であり、人間は生を覚醒するために、死ななければならない。「この世においてキリストがなした第一のことは死に打ち克つこと、そして復活と永遠の生命を準備することであった。生命、力、満ちあふれた永遠のいのち—これが真の善である。死はわれわれの生命を破壊する最大の悪であると同時に、こうした善をわれわれに得させてくれる唯一の関門でもある。ここに合理的な解釈のとうてい及ばない死のすばらしい逆説がある。¹⁷キリストの愛による自己犠牲が罪の不可避の結果としての死を自発的に自身に引受け、人類の罪を贖ったように、われわれはそれを真の生への道として自由に受取らねばならない。それによって死は精神的に克服される。そのとき死は、内面的意

15 前掲書 68頁

16 ベルジャーエフ著作集6 105頁

17 ベルジャーエフ著作集3 549頁

味を与えられ、内面的な精神の神秘の一契機となる。すなわち死は逆説的に内面的に精神の永遠の生へ導く。十字架をみずから担うことによって、生の源、キリストの生と死にかかわるとき、われわれは死とその破壊的結果を克服し、罪に満ちたこの世界の生を浄化し、永遠の生に変容する。

悪はたしかに本質的に無であり、さらにこの世のすべての有を否定し、無化する力でもある。図式的に、創造は無から有への移行であるが、悪は有から無への逆行であるといえる。両者は存在と非存在との関係において力動的である。われわれはともすれば存在論的に悪に対して永劫の地獄の烙印を押し、それに対して一切の意味を承認しないが、悪を絶対の無意味として、われわれが存在の絶対的意味を否定するとき、二元論が固定化し、悪の克服は完全に不可能になる。実際、永劫の地獄の観念は、悪を永劫化し、悪に対する人間の無力さを表現するばかりである。しかし、前述の悪の性格から明らかなように、悪の存在論は本来成立しえない。

悪を生み出す原因は自由にある。悪との戦いにおいて見られたように、悪の否定は、悪の自由、ひいては自由そのものの否定になりやすい。だが、自由のない善、強制された善は真の善ではない。悪の可能性、悪の自由は、それなしに善の自由、したがって善そのものも存在しえないから、善の成立条件である。原罪に見られるように、「悪を知らない天国の生活、自由のなんたるかを知らないもとの天国の生活は、神の似姿を宿す人間を心から満足させはしない。むしろ人間は、自由が最後まで試練を受ける生活、あるいはそういう天国を求めるのである。もちろん、人間の自由が試練を受ければ、当然悪が生じるであろう。しかしそれだからこそ、自由の試練を経たあたらしい天国の生活こそ、悪の本当の意味を知っている生活となるのである。」¹⁸悪は人間の自由に対する最高の試練である。悪を理解する実存的、非合理的方法は、悪をとりわけ精神における自由の試練として受けとめることである。悪は真の存在への目覚めに導く契機である。「悪は被造物の進展の弁証法的な一要素でありうる。しかし悪は一手段であるがゆえにのみ、悪の反対たる善の顕われることを可能ならしめる。」¹⁹しかしながら、悪はそれ自体が直接に善への道ではなく、暗黒の無から生じた悪との戦いは必然的である。悪は、それとの英雄的な闘争のなかに克服される過程において、自由の試練としての手段的意味をもつ。

悪は人間の魂のなかに悪に対する反抗心と精神的な力を喚起する。悪は精神的な洞察力の動因であり、源泉であった。その力によって悪の経験は下降の道（墮落）であるばかりでなく、上昇の道（超越）であった。人間は悪を通して最高善に到達しうる。悪を徹底的に生き抜くことによって、悪との闘争のなかに悪の空虚な本質が暴露されるとともに、その経験を通して最高善、もっとも充実した真理が認識されうる。人間は悪の虚無性と善の卓越性を形式的に法や掟によってではなく、生の経験において認識する。悪の経験は、悪の本性の暴露と悪の完全な拒否と克服によって人間の精神を豊かにする。悪の経験における悪の非存在性の暴露と認識が善に導く道である。象徴的にいえば、人間は闇を通して光に出る。それゆえに、世界に悪の暗

18 前掲書 653頁

19 ベルジャーエフ著作集6 113頁

い源が実存することと、最後のところでは悪はないということは、ともに正しいのである。

まず原罪において典型的な自由の試練が見られる。人祖アダムの楽園の自由は、善悪を知ることによって、破壊されねばならなかった。しかしながら、アダムの墮落において人間の自由はまだ完全には失われることなく、かえってアダムの墮落は、絶対的人間、キリストの出現を導いた。言いかえれば、アダムの自由は、キリストの歴史の実存を通じてより正しい、より高い自由、創造的自由が啓示されるために、必然によってのみ込まれねばならなかった。したがってアダムの墮落は、人間の創造性の啓示の一契機であり、より高い完全性への道を人類の前に開示する。

しかしながら、皮肉にも必然性の極である悪魔的自由、すなわち最後の悪の可能性は、キリストの出現後にはじめて生じた。キリストの啓示後に、存在の戯画、偶像、反キリストが出現する。人間の精神における創造的自由の確立とともに、その誤まった似姿として悪魔的自由が啓示される。人間はこの世界に閉じこもり、超越への道を見失ったとき、この悪魔的自由の力に属する奴隷となる。創造的自由の悪魔的自由に対する戦は終末論的である。悪の真の克服は聖霊の時代における人間の創造活動の如何にかかっている。聖霊の時代は、神的生におけるドラマの第三幕であり、終末にまで導く。したがってわれわれは、神的生のなかに発展の原理を受け入れるならば、悪に対して終末論的な意味を与えうるであろう。

(三) 善 の 本 質

天上の楽園の時代に、アダムはいわば前意識的段階において全体性を保っていたであろう。そこでは一切の分裂を知らない全体性の原理がすべてであり、善悪の区別を含めて、いかなる区別も対立もない。しかし意識がそこに生じて、そのような無意識に亀裂が生じると、天国の全体性は分裂とともに失われ、区別がなされ、善悪の間に明確な区別と対立が生じる。内面的分裂には苦しみと悩みが必然的にともなう。人間は善悪二元に苦しむ。しかしながら、その苦は二元的対立を克服する新しい力を生む。「『悪』を経験するとき、『善』には創造的な刺激が与えられる。『善』はそれだけ豊かになり、『悪』の挑戦に果敢に応ずるのである。『善』と『悪』という分裂のただ中に悩むときにこそ、人間には新しい知が与えられると²⁰いい。」この段階において、また人間の精神は悪の試練を経て、覚醒し、成長し、そして悪の力を弱める。それによって人間は、分裂した意識の枠をこえて新しい段階に進みうる。「われわれは悪を徹底的に体験しつくすことによって²¹はじめて、逆に、意識によっては到達できない完全な状態—すなわち、天上の楽園や永遠の至福—に達し、真の自分を復活させ、また絶対善を実現することができるのである。」この段階において、先の楽園時代のように善悪の区別はなくなるかもしれない。しかしそれは復帰ではなく、超意識的全体性の段階の出現である。この善悪の

20 ベルジャール著 5 精神と現実—神人的精神の基礎— 南原実訳 白水社 1966 183頁

21 ベルジャール著 3 97頁

彼岸において、悪の力は克服され、分裂した罪の意識は浄化され、完全に目覚めるであろう。

第二の段階の善は、悪の体験を経て、悪を知り、悪を克服し、善悪の区別を完全に超越したあたらしい天国における善である。此岸の道徳において悪と相対的關係にある善は、第二の全体性の段階において、罪とともに消滅する運命にある。この此岸的な善がこの世に生じると同時に、悪も生じ、善が消滅するとともに悪も消滅する。しかし、善悪の此岸にとどまるかぎり、部分的に分裂した意識はついに完全に崩壊し、分裂して、自己自身を否定して、暗黒の絶対無に戻ってしまうかもしれない。したがって、もし此岸的な善をそのまま永遠の世界に投影し、それを絶対化し、永劫化すると、それと対立する悪の永劫化が派生し、地獄が出現するであろう。

地獄とは、永遠の宿命であり、恩寵を拒否する暗黒の悪しき自由であり、非合理的な暗黒の無の世界における自由であり、さらに根源的な無へ逆行する虚無的自由であり、生の源としての本性を失った自由である。自由と恩寵とを失った地獄は、完全に運命にとらわれていて、そこから出る自由はない。地獄は、けっして単なる前時代的、非科学的観念ではなく、現代においてもなお人間の魂に生きている。「地獄とは自分が自分の殻を破って抜け出ることのできない精神状態をさしている。つまり地獄とはわれわれがまったく自己中心的になって他人を愛することが完全にできなくなり、暗黒の世界に自己を疎外し、悪しき孤立に悩む状態をさすのである。こういう状態におちいると、われわれは苦痛にみちた瞬間が際限なくつづく時間的世界に閉ざされ、その際限のない瞬間の連続に押され押されて底なしの深淵に送りこまれる。地獄は人間の魂を神や社会から引き離し、それを孤立させる。地獄では魂はすべてのひと、すべてのものから完全に孤立し、また同時にすべてのひと、すべてのものによって奴隷化されている。²²人間はそこにおいて永遠から離れ、悪無限におちいる。人格的存在としての全体性を失い、意識の総合的能力を失うとき、地獄の夢魔が生じる。人格の断片や分裂した意識は、夢魔のうちに生き、自己の殻のなかに閉じこもる。この人間性の喪失からの救済は、地獄の体験における精神の苦しみと悩みである。人間は地獄の夢魔によって悩まされるが、その苦が地獄に対する精神の積極的な闘争をひき起す。その戦の勝利は、人間を夢魔から解放し、永遠の生命へと覚醒させる。そして、地獄の苦しみを体験するのは、人間が神の似姿であり、神的光に照らされているからである。もしも暗黒の非合理的な根源的な無へ逆行したとするならば、人間にはもはや地獄の苦しみはなくなるはずである。

創造神は、自由を欲したがために、この世に悪の存在をゆるし、その結果、善悪の此岸において善と悪との関係に悲劇的な逆説が生じた。この世において、悪の自由がゆるされ、絶対的人間はまだ実現されず、また絶対的な秩序、悪の存在をゆるさない絶対的な善、絶対的な理性は存在せず、秩序と混沌、合理性と非合理性、善と悪が闘争し、葛藤しあいながら混在する。善悪が宿命的に相対的な関係にあるこの世において、悪の自由を一切容認せず、完全性、秩序、

22 前掲書 606-7頁

そして合理性の絶対的な支配が行なわれるならば、人間の自由は失われ、かえってそこに暴政が生じ、大審問官と反キリストの支配する悪の王国が出現するであろう。

逆説的に自由の奴隷である人間も、自由に対して無力な造物主も、自由の矛盾を真に克服しえない。人間の自由にとって宿命的な地獄の恐怖を克服するのは、無根拠の深淵にみずから下降した神人、キリストによってである。キリストの贖罪は、神の創造のドラマの第二幕であった。「自分を犠牲にして悪を贖い、悪を本質から変えてしまうこと—それが悪を窮極的に克服する唯一の方法である。」²³絶対的キリスト教的真理は、一方において贖罪に向かい、他方においてそれを通じて浄化された人間の自由に積極的な創造活動への参加を呼びかける。キリストは、人間性をうけもどし、救済するばかりでなく、人間を創造活動へうけもどし、新しい聖霊の時代における精神の創造活動を可能にする。人間の創造活動においてキリストの全体が啓示され、人間はキリスト的、絶対的人間になり、絶対的な善を実現する。善悪の区別の彼岸にあって、裁かず、価値評価せず、ただ光明を与える自由な善が成立する。それは人間の自由のために隠されてある真理である。したがってわれわれは善悪の此岸において、善悪の区別を実在的でなく、象徴的として考えねばならない。善悪の区別への象徴主義的接近が、道德上の絶対的真理へ、絶対善へ導く実在主義への架け橋になるであろう。それは人間の精神の創造活動を通じて実現されるであろう。

創造活動は、神によって人間に課せられた使命であるとともに、人間における神的原理の働きである。なぜならば、神の自由な愛によって人間の自由のうちに神の御姿が宿り、非合理的自由が創造的自由に高まるからである。この世における神の啓示はキリストの歴史的事実において、人間が神の創造への呼びかけに応じることによって、すなわち創造活動において人間を通してこの世に伝えられる。人間は創造活動を通じて自己のうちにひそむ神的要素を実現する。それが同時に人間の真の道德的生活である。それゆえに道德的生活は、創造活動の三位一体的実現の一環としてとらえられる。われわれは、生の源としての神的原理を実現しようとする創造への意志を堅持する。それによってわれわれは、空虚な悪への意志を真に克服しうるのである。

神は、価値の根源や無限の愛として啓示する。神の愛は、人間の愛の本質である。愛は、自由とともに創造活動の基本原理である。「まことに愛は創造活動の源であるばかりでなく、それ自体が創造活動であり、創造的エネルギーの放射である。この意味では、愛は霊的世界のラジウムともいえよう。」²⁴愛は、創造的エネルギーの実現である。そして創造的エネルギーは、創造への意志の表現である。われわれは、この世における悪と対立した相対的善を目的とするのではない。創造活動のエネルギーそのものが善である。これが創造の倫理の核心である。「われわれは善を目的と考えるから善をおこなうのではなく、まさに自分が善人だから一言い換えれば自分のうちに善にうちこむ創造的エネルギーを持っているから—善をおこなうのであ

23 前掲書 653頁

24 前掲書 312頁

る。われわれが善のために悪と戦うのは、自分が意識的に自分に課した目的だからではなく、悪を滅ぼし善を栄えさせようとするエネルギーによってわれわれがそうせざるをえないからなのである。」²⁵ それゆえに道徳的生活における価値の基準は、抽象的な最高善にではなく、創造的エネルギーの、そして創造活動はわれわれに永遠の生命をもたらす力をもっているのであるから、生命力の、質的向上と量的増大にあるといえる。これが、法の倫理と贖罪の倫理を超越した第三の創造の倫理である。

創造の倫理において、善のエネルギーは人間の究極目的である美を実現するための手段である。ここでいう「美とは創造力の自己表現的な姿である。それは全世界にエネルギーを放射し、それによって全世界の相貌を変えてしまう力である。」²⁶ われわれはもはや法の倫理や贖罪の倫理のもとで悪におののき、罪におびえたり、抽象的な規範や掟にしばられるのではなく、新しい創造の倫理のもとで、われわれは積極的な自己、自己の創造力に目覚め、消極的な自己意識から解放されるであろう。創造力の倫理は人間に未来へ向って新しい未知の生、この世よりも精神における生への靈感を与えるであろう。精神における生は、世界の精神的革命によって相対的な対立関係を超越した彼岸の美的調和の生である。

創造的道徳の核心は、人間の精神の自由、良心の自由である。それが新しい道徳のディオニソス性を昇華させる。「良心は宗教的啓示、善、正義、あるいは真理を全面的に知覚する器官である。良心は人間の特殊な一部分でもなければ、一機能でもなく、まさに人間という霊的存在の全体である。つまり良心は心理学的な意味ではなく、存在論的な意味で人間の中心を形づくる。良心はいわば霊の人間の心臓にあたる。」²⁷ 人間の道徳意識は、悪と偽善に汚され、人間を奴隷化する情欲にとらわれやすいが、純粹良心はこの世のうちにおける自由でなく、この世からの自由を有し、この世の力に汚されない。純粹良心がこの世の象徴主義のベールをはぎとり、それによって創造的人間は道徳的に浄化され、生まれ変わって、根源的な生に達する。ベルジャーエフは終末論的倫理学の命題をこう要約する。「なんじは神の呼びかけに答え、自由な創造活動によって神の御業を相ともに成就するように行為せよ。なんじの胸のうちに、純粹にして汚れなき良心をはぐくみそだてよ。なんじの人格を鍛えよ。なんじ自身のうちなる悪、あるいはなんじの周囲をとりまく悪に対して敢然と戦いを挑め、ただしそれは悪人を地獄に追いやって悪の国をつくり出すためではなく、かえって悪を征服し、創造活動によって悪人にふたたびあらたな生命をあたえんがためなり。」²⁸

道徳的生活における人間の最高の目的は、新しい生の創造である。創造は総じて強烈な個性の発露である。新しい生の創造は、すべて個性の神秘を通っている。創造的道徳は、形式的、一般的、あるいは没個性的な法の遵守でなく、道徳的創造性における人間の個性的、質的啓示

25 前掲書 323頁

26 前掲書 323頁

27 前掲書 368頁

28 前掲書 654頁

である。「福音の道徳はわれわれがつねに個人として行為することを一換言すれば、各人がそれぞれ他人とは違った行為をなすべきことを一主張する。そこではキリスト教の至上命令は、(一)各人の道徳的行為は他人とはまったく違った比類のないものでなければならない。(二)ひとは道徳的行為をなすとき、つねに生命を持つ具体的人格を考え、抽象的な善を考えてはならないということになるだろう。」²⁹ 創造的道徳は、生きた具体的人格の道徳であり、個性的、人格的、小宇宙的性格を持つ。だが、それはけっして単なる個人主義的道徳ではない。創造的道徳において、個人の創造的エネルギーは宇宙の中へ注ぎ出され、そして宇宙は、個性的なものによってみたされる。そこにおいて人格的なものは、普遍的なものとして表現され、普遍的なものは、個性的なものとして表現される。創造的道徳は普遍的な道を知る。そして各自は個性的な目標をかかげ、個性的な道を主体的に歩まねばならない。

創造的道徳において、血の気のない抽象的観念でなく、創造された新しい生、みずみずしい生の充溢、生きた具体的人格そのものが、価値である。キリスト教は、人格についての啓示であり、善の観念よりも人間そのものを尊重し、人間の絶対的価値を承認する。そのキリスト教的世界観を前提として、「創造の倫理から見れば、人間はかいなる観念からも解放されたりっばな価値であり、創造的エネルギーを放射してすべてのものに光と力とをもたらず任務を帯びたすぐれた存在である。」³⁰ しかしながら、自由な精神として創造する人格は、たしかにそれ自体、絶対的、最高の価値であるが、人格はその創造活動においてつねに自己を超越し、超人格的価値に結びつく。「では人格と超人格的価値との関係はどうかというと、人格は超人格的価値によってはじめて存在することができる。換言すれば、人格はその前提条件として絶対的価値、すなわち神を予定するというわけである。もしも神が存在しないならば、人格も存在しないであろう。存在するのは、人類の一部として自然に隷属する個人にすぎないであろう。」³¹ 神との愛と自由の関係において成立する人格は本質的に神人的であり、人格主義的人間学は究極的にキリスト学となる。そしてこのキリストは十字架のキリストでなく、栄光のキリストである。

人格的愛の関係は内面的にも成立する。「精神的生命は心身を形づくる生命と対立したり、それを破壊したりするものではなく、かえってそうした種類の生命をより高い秩序へみちびき、より高尚な質をあたえ、そして一般の生命を越え、自然を越え、存在を越え、ついには神性をも越えたものへ高めるのである。こうして至高の境地に到達した『生命』は、われわれにとって最高価値、あるいは絶対善の象徴となる。またそれと同時に、最高価値や最高善は真の存在者の象徴となり、またこの存在者は究極的神秘の象徴となるのである。」³² 聖霊の時代において、創造的道徳における価値の象徴主義的階層秩序、究極的神秘—真の存在者—絶対善—生命が予

27 前掲書 247頁

30 前掲書 313頁

31 前掲書 135頁

32 前掲書 60頁

ベルジャーエフの終末論的倫理学について

言的に成立する。そしてそこにおいて人格の尊厳が確立される。しかしながら、キリストの出現が反キリスト的自由を招いたように、聖霊の時代において、反聖霊の自由が出現するかもしれない。聖霊に対して言い逆らう罪は、キリストによっても赦されない極悪である。それゆえに、われわれは、自由な精神の創造活動とともに、終末にいたるまできびしい十字架の試練の道をたどらねばならない。

われわれが悪との終末論的戦において見出した終末論的倫理学に現実の歴史悪、社会悪に対する力を与えるために、歴史の実存の倫理からさらに社会的実存の倫理へと地平を開かねばならない。歴史の実存と社会的実存との総合を³³一多主義に求め、人間学の新しい方向を探り出すことをわれわれの次の課題としたい。

(1969年7月22日)

33 The Meaning of the Creative Act p. 18 の monopluralism よりヒントをえた概念である。